

めいせ

理科の子

1

安達 誠

新聞やテレビで「子どもの理科離れ」と言われて久しくなります。本当に、子どもたちは理科が嫌いになってしまったのでしょうか。私は小学校に勤務している理科教師ですが、子どもたちに理科への嫌悪を感じることはほとんどありません。

学校から帰ってきた子どもから、理科の授業で習ったことを一生懸命説明してもらったという経験をした方は少なくないと思います。子どもたちが面白いものに夢中になり、不思議なものに興味を持つのは、今も昔も変わらないのです。

理科の授業のことを、得意になつて説明してくれる子どもの姿を見ていると「うちの子は、理科が好きなんだ」と思うものです。ところが、テストの採点結果をもらってると、予想外に低い点数になっていて、驚かされます。つまり、「理科が好

家庭での学習 大切に

「でも」理科の勉強が得意」とはならないのです。

理科が好きなのは、新しいものを体験することや、ゲーム感覚で実験などをすることが好きです。一方で理科の学習は、算数のような明快な答えの出ないものが多い上に、名前など覚えることが多くあります。授業を受けているときは新しい事実の発見にいきいきしていますが、そこで終わってしまい、家庭で理科の学習に取り組む子どもたちはほとんどいないのが現状なのです。結局、これが低い点数をもたらしています。

算数や国語の学習に力を入れる家庭は多いですが、どうも理科は大切にしてもらえないようです。でも、理科もまた家庭で大事にしてもらいたいと思います。科学的な思考力や表現力を養うため、国語や算数の力を結びつけて複合的に活用する教材だと考えるからです。

(小学校教諭)



イラスト・藤井啓祐

理科や算数の苦手意識をなくし、将来は理系に進める子どもに育ててほしい。そんな希望を持つお父さんやお母さんに、家庭でできる子育てを解説します。

× × ×

あたち・まこと 53年京都府生まれ。京都市立大塚小で理科を教え、天文研究者としても活動。著書に「中学生まで決まる！リケゲン、リケショの育てかた」(保育社)など。

教育

中一の健二(仮名)の母親が、「息子がクラスの子どもをいじめてしまった。親としてどうすればいいだろうか」との相談を寄せてきた。

健二の母は、まさか自分の子どもがいじめをする

当に強いというのは、困っている人を助けたり、人に優しくしたりすることだ」と言われると、はっとした表情を見せたという。

は思いも寄らなかった。自分の子育てに原因があるのではないかと悩んだ上で

の相談だった。その際、母親はこれまで自分が出会ってきた人とのつながりや、

家族への思いを話された。それを聞き、私たちは「そのまま息子さんへ話してください」と伝えた。そして、人と人との関係は「強い・弱い」ではかるものではないことをしっかりと伝えてほしい、と付け加えた。

れ、誰もが追い立てられるように忙しい日々を送っている。その中で自分らしく生き抜くすべを取り違え、人に競り勝つことが目的になってはいないだろうか。それが「いじめ」という形をとり、加害者・傍観者となって助長している。

そんな理由であつと、いじめは許されないことを、大人が子どもに話し込む必要がある。

ある調査に、いじめの加

は教育相談

校やいじめ

の研究者

無料

ココロノート



イラスト・中村公子

いじめの背景

「競り勝つ意識」が助長

EDUCATION

真剣な表情でハクサイの苗に土をかける親子(東京都港区の「子育てひろば」あじこほーむ)。

自然に触れ おおらかに

子どもが農作物の栽培や収穫を体験すると、普段食べているものに興味を持つようになる。それが有機農業の場合、安全な農作物に関する知識を得られるばかりか、虫や有機肥料に触れることで、おおらかに育つと期待する声もある。

子どもの有機農業体験

快晴の土曜日、千葉県木更津市の「農業公園ぼんぼこ村」に親子連れが集まった。有機肥料を配合し農薬を使わない農業を体験できる施設で、旅行会社「アドサン」(同市)の直営だ。

経営者の三上徳康さんが、市の子ども会に関わるつちに食物アレルギーを持つ子に出会い「本物を食べさせてあげたい」と考えたのが取り組みのきっかけだという。

「小さくてもふくらんでいたらよい」と三上さんの一声でサツマイモ堀りが始まった。土からは虫やカエルも出てきて、緊張で黙っていた子も「おっきいの取ってやる!」「モグラさんが掘ればいいのに!」とよく話すようになり、泥だらけになっていた。

わが子を見守っていた川崎市

食の安全 学ぶ機会にも

の仁科繁さんは「農薬を使っていないから何に触っても大丈夫。安心して遊ばせています」と目を細める。三上さんも「小さいうちに、調味料のいろいろな野菜本来の味を覚えてほしい」と話していた。

このような活動は都市部でも広がっている。東京都港区のNPO法人「あい・ぽーとステーション」が区の支援を受けながら運営する「子育てひろば」あい・ぽーと」では、有機野菜の植え付けから収穫までを体験できる。社会園芸学科のある恵泉女学院大学とともに企画した講座だ。

この日は、以前まいたハクサイとダイコンの種の様子を確認。同大教授の沢登早苗さんは子どもたちに「前回(肥料として)牛のウンチやおしっこを入れたね」と優しく話しかける。決して添加物を否定するわけではなく、沢登さんは「それがどういふものか、子どもたちがわかっていることが大事です」と力を込める。

有機農業の体験で得られるのは何だろうか。「農業で子どもを育てる」(子どもの未来社)の著者でフリーライターの蜂須賀裕子さんによると、子どもたちは野菜に多少の虫や泥が付いていた、色や形がバラバラだったりしても気にしなくなるという。「人間だっているんな人がいると考えると、おおらかになるのでは」と指摘している。



わが子を見守っていた川崎市

家族への思いを話された。それを聞き、私たちは「そのまま息子さんへ話してください」と伝えた。そして、人と人との関係は「強い・弱い」ではかるものではないことをしっかりと伝えてほしい、と付け加えた。

家族、地域、学校などがつながり、思いやりのある環境で自尊感情が育まれると、人を「強い・弱い」でとらえる発想は生まれにくい。しかし、大人社会の反映なのか、子どもたちは自分の生活経験の中で「強い・弱い」を身に付けてしまっているのが現実である。

子どもは勉強に部活に、大人は労働に結果を求めら

れ、誰もが追い立てられるように忙しい日々を送っている。その中で自分らしく生き抜くすべを取り違え、人に競り勝つことが目的になってはいないだろうか。それが「いじめ」という形をとり、加害者・傍観者となって助長している。

そんな理由であつと、いじめは許されないことを、大人が子どもに話し込む必要がある。

ある調査に、いじめの加

は教育相談

校やいじめ

の研究者

無料

子どもどう

人の問題と

乗り越えた

「親子と